

# 日本の学童ほいく

全国学童保育連絡協議会

# 普及拡大 ニュース

みんなで読もう！ 目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

2022年12月7日

元気が出る  
みんなの  
取り組みを  
ご紹介

## 楽しく普及拡大

知恵を出し合い意識的な働きかけで、ほいく誌の普及拡大を進めよう！

### 学童保育への理解を広げるため、ほいく誌の普及拡大を！

熊本県学童保育連絡協議会では毎年度の総会で『日本の学童ほいく』の購読部数の目標を決め、普及拡大に努力することを確認しています。

県内の学童保育の中には月に1回2時間程度、読みあわせをして意見交換を行っているところもあります。また、読み合わせの時間が取れないところでも、日々の実践に重要と思われる記事について、感想を述べ、意見を出し合っている学童保育もあります。

近年、部数は減らしてはいないものの、まだまだ目標の購読部数に達していない状況です。さらなる取り組みとして、全国学童保育指導員学校開催のご案内の際に、ほいく誌のチラシに県連協の名前を印刷し、県内全ての学童保育に配布しています。また、県連協は熊本県と熊本市から委託を受けている放課後児童支援員認定資格研修の際にも、ほいく誌チラシと見本誌を置いて受講者に手に取ってもらい、「ぜひ読んで日頃の実践に活用してほしい」とご紹介しています。

その甲斐あって、ささやかではありますが、購読の申し込みをいただくようになりました。また最近では、ある自治体担当者から「研修に活用したい」との申し出をいただいています。

コロナ禍でなかなか対面での研修会がむずかしい状況が続きますが、「日々の研修の場」として、また学童保育をより理解していただくために、ほいく誌の普及拡大に向け、県連協として意識的な取り組みを行っていきたくと思っています。

## 熊本県の取り組み



学童保育への理解を広げよう深めよう

## 月刊『日本の学童ほいく』 普及拡大の手引き

- 働きながらの子育てに
- 保育実践（生活づくり）に
- 保護者と指導員の共感を育む
- 学童保育をよくするために
- 保護者と指導員が自らつくる
- 学童保育の専門月刊誌・全国連協の機関誌です

普及拡大に  
役立つヒントが  
あります！



## 日本の学童ほいく12月号

### 特集 生活の場としての 施設と環境を考える

今回の特集では、「子どもたちが共に生活を営む場」である学童保育の施設と環境について、大切にしたい視点を学ぶとともに、全国各地の施設・環境を整え、改善するための取り組みや、各学童保での工夫や努力を交流します。



# 日本の学童ほいく

みんなで読もう目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

# 普及拡大 ニュース

2022年12月7日

## 読者の声

### 愛知県名古屋市●保護者から

2022年8月号の特集「共に学び、共に歩む——みんなでつくる『学童保育連絡協議会』」に、谷口雅子さんが書かれた「保護者と指導員がつながりあって、子どもたちに豊かな放課後を」を読みました。複数の学童保育所を一括運営することにした愛知県津島市の学童保育の歴史が書かれており、「みんな」の考え方にとても共感しました。コロナ禍になって2年半が過ぎようとしていますが、その間にオンラインでの保護者会や地域の連絡協議会の会議が日常となりました。オンラインの会議は、黙っていてもどんどん進行します。一言も発言しなくても会議が終わることもあります。せっかくみんなで同じ時間を共有しているのに、少しさみしいなあと感じていました。私は脱線しつつもみんなでおしゃべりもしつつ進行する会議があったから、保護者同士のつながりができました。そのつながりは、卒所したいまもつづいています。この記事を読んで、全員参加型の会議の進行の工夫ができないものかと、あらためて考えさせられました。

『日本の学童ほいく』2022年12月号「読者のひろば」より

### 東京都江東区●保護者から

2022年10月号の特集「異年齢の子どもたちで仲間関係を紡ぐ——学童保育の生活」に掲載されていた、田村こころさんの「仲間と共に経験を重ね、育ちあう日々を……と願って」を読みました。

かぎられた誌面からでも、1学期から3学期の子どもたちの変化が伝わってきました。姉妹を子育てしている親としては、ついその場で平等性を判断し、声をかけてしまいそうなのですが、子どもたちの様子を見ながら機を見て声かけをし、見守っていく指導員さんの関わりが印象に残りました。高学年・低学年という異年齢だからこそ、言えない・譲ろうなどの心の葛藤が子どもたちにあったのだろうな……と拝察します。その心の葛藤も見守り、ときには受けとめてくれる指導員さんがいてくださったからこそ、子どもたちはあるがままの姿で遊びあい、共に過ごし、感じあう毎日を積み重ねてきたのかなと思いました。また、自分のやりたいことを実現していく過程で、自分の力がほかの子の「できる」につながっていく、子どもたち相互の成長の様子も感じました。退勤後帰宅し、就寝まで時間に追われる毎日ですが、子育てにおいても、「待つこと」を意識しようと思います。

『日本の学童ほいく』2022年12月号「読者のひろば」より

ある日、大好きな先生から「うれしい投稿を見つけたので誰かに知らせたくて送りました!!」と、小さな新聞の切り抜きを添付したメールが送られてきました。そこには、小学校2年生から中学生まで不登校であった娘さんとの歩みを支えたのは『日本の学童ほいく』であったこと、少し苦労が必要な子育てのエッセンスが、指導員さんの実践のなかにあって、それがキラキラと輝いて見えたこと、研究者の先生方の理論的な論稿も大変勉強になったこと、読んで学んだことを娘さんと確認しあってきたことが綴られていました。そしてこの投稿が、「『子どもの権利条約』がこの子を育てたと、少し大きくなるけれどそんな気がしている」と結ばれていたのも強く印象に残りました。

私は、これを読みながら、その文面から浮かんでくる景色といま気がかりな子どもの姿を重ねたり、「子どもの権利条約」のもとに働いているという指導員の仕事への誇らしさをあらためて実感したり、ほいく誌の“価値”をこの親子と共有できたうれしさをかみしめたりと、気が付けばポロポロと涙が溢れて止まりませんでした。この親子はどうやってこの雑誌に巡りあったのかな？ もしかして学童っ子だったのかな？ これでいいのだろうかとききに立ち止まり、ふり返るたびに涙する日も重ねながら、我が子にとっての『最善』を探りつづけてこられたのだろう。一組の親子を支えた一冊が『日本の学童ほいく』であったことがとても誇らしく、私も誰かに伝えなければと思いました。

私と「ほいく誌」

読者リレー執筆・今月は和歌山県串本町から  
指導員の城谷千鶴さん